

窓

フォト劇場 (74)

写真が生まれるものがたり

ホスピスの窓より訣れの空を見る義姉は菩薩のま
なざしをして
加藤慶子

ホスピスは二度と出ることのない場所。最期
を悟った義姉は、幾度となく個室の窓から雲
の流れや星が瞬く夜空を眺めたことだろう。
大らかな性格の人だった。面会に行った二日
後、義姉は安らかに永遠の眠りに就いた。

行き来する風見ゆ魂見ゆ^{たま}独り居の白昼、窓のカー
テン揺れて
佐藤 玄

電灯の点いた室内からでも、日中にこのアン
グルで撮れば、こういう感じになるだろう。
画面の補整はされなかった。その意図に順っ
た。明るい外光と暗い室内。窓の内側には、
ほのかな白いものの動きが見えそうだ。



写真・木畑紀子

犬連れて畑中の径行き帰る夫を目守りぬあさの窓
辺に
横山裕子

停年後大病を患い片肺の身になった夫は、
との朝の散歩を日課とした。当時家の前方に
は田畑の眺望が開け、リビングの窓から見え
た野球帽の夫と犬の姿は、今もありありと目
に浮かぶ。夫が世を去って十八年になる。

如月に逝きたる母へ供花のごと枝垂れ紅梅窓越し
に見す
渡辺京子

日本が最も貧しかった頃、昭和24年が明けて
間もなく母は旅立った。八畳間の障子を開け
て母は、柿や蜜柑、茶の花を眺めていたのか。
今は佐助や三葉つつじが庭を彩り、藤も花を
垂らす。九十二歳なれど母が恋しい。